

恵泉 樹の文化史(4)

カエデ

宮内 泰之(人間環境学科)

1. はじめに

カエデは秋の野山を彩る樹木として、古来から日本人に親しまれてきた。「紅葉」と書いて「もみじ」とも読み、カエデのことをモミジと呼ぶこともあるように、カエデは紅葉・黄葉(以後、両者まとめて紅葉と表記)する樹木の代名詞である。「モミジとカエデの違いは?」と問われることがよくある。モミジとは、カエデの別称、または紅葉することや紅葉した葉そのものを指す。さらには、紅葉している樹木全般をモミジと総称してもよいだろう。万葉の時代、山々を美しく彩る紅葉を「毛美知波(もみちは)」と呼び、その中で葉が切れ込んでカエルの手を連想させるものを「賀閉流手、蝦手(かへるで)」といった。それが転じてカエデとなったとされている。カエデは紅葉の美しさを愛でるのみならず、庭や公園等の水辺を演出する役割も担い、多くの園芸品種がつくられてきた。紅葉だけでなく、早春に芽や若枝が徐々に赤く染まっていく様子は、春の到来を予感させ、生きる喜びを感じさせる。

2. 楓と槭

カエデはカエデ科カエデ属(*Acer*)に属する樹木の総称である。カエデ属は世界に約150種あり、北半球の温帯、亜寒帯から熱帯の、平地から山地まで分布する。日本には20種以上が、谷沿いから斜面の適潤地を中心に自生している。いずれも高木または小高木で、ほとんどが落葉性だが、まれに常緑性のものがある。葉は対生し、切れ込むものが多い。

カエデを漢字で書くと一般的には「楓」となるが、正しくは「槭（せき）」である。本来、楓（ふう）は中国原産でマンサク科のフウ（*Liquidambar formosana*）を指す。公園等では同じフウ属で北米原産のモミジバフウ（*L. styraciflua*）を見かけることが多いが、フウ属の植物はいずれも日本には自生しない。フウ、あるいはモミジバフウの葉はカエデの葉に似て3裂あるいは5~7裂し、美しく紅葉するため、カエデの仲間間違えられることが多い。しかし、カエデの葉は必ず対生するが、フウの葉は互生するので簡単に区別することができる。両者は花や果実の形態もまったく異なっている。カエ

デといえば、秋にプロペラのような果実（翼果）がクルクルと回りながら落ちていく。一方、フウの果実はクリの‘いが’のように見え、落葉後にもぶら下がっていることが多い。ちなみに、カエデの翼果はクルクルと旋回することによって滞空時間が長くなり、より遠くへ運ばれるようになっている。この翼果は花の段階



写真1 ハウチワカエデ両性花

で既に翼の部分が用意されている（写真1）。カエデの花は小さくて目立たないが、両性花の中を観察してみると、雌しべを中心に小さな翼が対になっているのが見える。

そもそも、なぜ楓と槭を混同するにいたったのだろうか。北村四郎(1990)には「中国ではマンサク科のフウ（楓）の紅葉が美しいので詩文にあらわれる。日本ではフウをカエデと勘違いして、楓をカエデと読む」とある。冒頭でも述べたように、万葉の時代には既にカエデとして意識され、その紅葉の美しさが愛でられていた。当時の貴族階級の知識人にとって、大陸（隋さらには唐）は憧れの対象であった。野山を彩るカエデを、大陸の詩文にみられる楓として自らの歌に詠み込むことは、教養を楽しみ、誇る上で格好の題材であったのだろう。

2. 平安貴族とカエデ

平安時代以降、カエデは庭園内で欠くことのできない樹木となっていく。西暦894年、菅原道真により遣唐使が廃止され、以後、国風文化が花開く世の中となる。貴族の庭園も唐風のウメやタケ、キクに代わり、春はサクラの花、秋はカエデをはじめとする紅葉する樹木が彩る和風の空間へと変容していく。平安時代に書かれた日本最古の作庭書である『作庭記』には、「但古人云東には花の木をうへ西には‘もみち’の木をうふへし 若いけあらは嶋には松柳釣殿のほとりには‘かへて’やうの夏こたちす、しけならん木をうふへし(但し、古人は東には花の木を植え、西にはモミジの木を植えよと言っている。もし池があれば、島には松、柳、釣殿のほとりにはカエデのような夏木立の涼しそうな木を植えるがよい)」（森蘊,1986）とある。モミジとカエデを言い分けていることから、作庭記の作者(藤原頼通の子、橘俊綱説が有力)はそれぞれを区別していたものと推測される。また、池辺にはカエデとしていることから、作者はカエデの自生地環境に基づく植栽計画を推奨しているのであろう。カエデやモミジを西側に植えるという考え方は、源氏物語少女巻、六条院の四季の庭にもみることができる。また、平安から鎌倉時代に貴族の間に流行していた蹴鞠の鞠庭では、懸かり木(または式木、四季木ともいう。鞠を蹴り上げる高さの基準となる樹木)としてカエデが植えられた。鞠庭の4隅には懸かり木として、北東にサクラ、南東にヤナギ、南西にカエデ、北西にマツを植えるものとされている。沈みゆく夕日と、散りゆく紅葉との共通するイメージが、カエデは西側に植えるものとさせていたのだろうか。あるいは、カエデの葉が強い西日を受けることにより、晩秋の紅葉をよりいっそう鮮やかにすることを狙っていたのかもしれない。

3. 夢窓疎石とカエデ

南北朝時代の禅僧であり日本庭園史にも重要な足跡を残す夢窓疎石は、サクラとともにカエデを好んでいた。当時の記録によると、鎌倉瑞泉寺山頂の偏界一覽亭周辺はカエデの林となっていたことが窺える。また、京都

西芳寺は現代では苔寺として有名だが、夢窓疎石の頃にはサクラやカエデが植栽された明るい庭だったようである(飛田範夫,2002)。さらに、後醍醐天皇の菩提を弔うために開山された天龍寺は、紅葉の名所である嵐山に位置している。天龍寺庭園は園内においてもカエデが重要な役割を果たしている。天龍寺庭園は、大方丈から曹源池越しに枯山水の滝石組み(龍門瀑)を眺める景が一般的に正面ととらえられている。確かに、大方丈からは龍門瀑が正面に見えるが、滝の流路があからさまに見え過ぎてしまう(写真2)。そこで、脇の書院の上座に位置を移してみる。すると、曹源池は手前のマツの植栽で大部分が見えなくなり、龍門瀑もカエデの枝になかば隠されてしまう(写真3)。しかし、いずれも全貌が見えないだけに、見る者の想像力に任される景となる。余計なものが見えなくなり、龍門瀑の背後の樹林とさらに後方の嵐山とが、あたかも連続しているかのごとくいっそう意識されてくる。大方丈と書院、どちらが正面の景かというよりは、大方丈、書院それぞれの景があると考えるべきであろう。いずれにせよ、この場合のカエデは、両者の眺望に効果的な違いをもたらす役割を演じている。夢窓疎石開山当時に、同じ位置にカエデが植えられていたかは不明である。しかし、疎石の作庭思想は、このカエデの植栽から確かに読み取ることができる。



写真2 天龍寺龍門瀑(大方丈より)



写真3 天龍寺龍門瀑(書院より)

4. カエデの園芸品種

カエデは花が地味であるにもかかわらず、古来から多くの園芸品種がつくられ、紅葉、若葉の色の变化、葉の切れ込み、斑入りの具合、樹形等さまざまに愛でられ、今日に至っている。北村(1961)には、「日本ではカエデ類は観葉植物として広く愛され、多くの園芸品種がある。徳川時代の地錦抄には100品種を、明治15年(1822)の槭品便覧には202品種を解説している」とある。中尾佐助(1986)には、「落葉樹ではカエデの改良がすばらしい。日本には紅葉する樹木は多いが、栽培下で多数の品種ができたのはカエデ類だけであろう。日本のカエデの栽培品種は珍しくも多くの異なった種からとりだされている。(中略)そのほとんどは枝変りから選択されており、交配はない。」と述べられている。

矢野正善の『カエデの本』(2003)には、カエデの園芸品種が460種以上掲載されている。このうちイロハモミジ(*Acer. palmatum*)系のものが163種、オオモミジ(*Acer. amoenum*)系127種、ヤマモミジ(*A. amoenum* var. *matsumurae*)系100種があり、これら3種で8割以上を締めている。いずれも葉は5~7中~深裂し、葉縁は単~重鋸歯となっている。葉色は緑、朱、赤紫、斑入り等と多岐にわたり、枝垂れ樹形のものもある。その次に多いのは、葉が7~13浅~中裂するハウチワカエデ(*A. japonicum*)やオオイタヤメイゲツ(*A. sirasawanum*)系だが、20種程度である。以上はいずれもカエデ節の種で、これだけで410種である。カ



写真4

エデ節以外では、葉が3~5裂し、鋸歯縁のウリカエデ(*A. crataegifolium*)系が15種、葉が3裂し、ほぼ全縁のトウカエデ(*A. buergerianum*)系が12種、葉が全縁のイタヤカエデ(*A. mono* var. *marmoratum* f. *heterophyllum*)系(写真4)が11種、その他、ネグンドカエデ、セイヨウカジカエデ等の外国産の園芸品種が10種程度見られる。なお、雑種は少なく、7種程度である。

5. おわりに - 園芸品種の功罪 -

私が多摩や丹沢の山で植物を見ながら歩いていると、まれにヤマモミジの逸出ではないかと思われる個体を見かけることがある。ヤマモミジは日本海側に分布するオオモミジの変種であり、イロハモミジも含めてその差は微妙であり、交雑が起こらないとも限らない。自然公園等の奥山の園地や歩道沿いにヤマモミジ系の園芸品種が植えられていることに起因するものと考えられる。カエデの園芸品種を日本の文化として後世に伝えていくことは大切である。その一方で、自然や野生のカエデの不変性というものも大切にしたい。これはカエデ類だけの話ではなく、様々な緑化樹、園芸の草花にも該当する話である。造園、園芸に携わるものとして、そのあり方を今一度考え直してみたい。

参考文献

- 飛田範夫.日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会.2002.
北村四郎.原色日本植物図鑑.保育社.1961.
北村四郎.園芸植物大事典.小学館.1990
森蘊.「作庭記」の世界.日本放送出版協会.1986.
中尾佐助.花と木の文化史.岩波書店.1986.
矢野正善.カエデの本.日本槭刊行会.2003.